巻頭言

災害の閉塞感を越えて

髙橋 博達
当協会理事　研修委員会 委員
（浜松市リハビリテーション病院 副院長、医師）

この原稿を書いている3月中旬、世のニュースは新型コロナウィルス一色です。この病原体が、われわれの生活に大きなマイナスを生じている現在はまさに「災害」といえる状況です。今回の“新型コロナ”によって当協会も札幌での研究大会をはじめ、研修会や会議の中止、ネット会議への変更など、大きな影響を受けています。

世界では中国から感染拡大の中心がヨーロッパ、アメリカに移り、国を越えた人や物の動きが止まっています。日本でもイベント中止が拡大。新幹線や航空機などの長距離移動は敬遠され、コンサートや演劇、博物館、テーマパークが次々閉鎖・休止となり、不要不急の外出を控える動きが加速、経済への影響も計り知れません。出口の見えない現状でわれわれの生活や心までも侵食されてきているのを実感する日々です。

今と同じような閉塞感を私は9年前にも福島で経験しています。県内でリハビリテーション科医師をしていた私は、2011年3月11日を境に生活状況や心がまったく変わってしまったことに愕然として過ごしていました。東日本全体が休眠状態となり、病院の通常の業務さえ行えず、その日その日の食糧・燃料の調達に奔走し、病院を存続させていくことに必死になっていたのを思い出します。生活状況が一変し、「再び平穏な日々がくるのか？」と途方に暮れていたあの頃と現在は、心の状況においてピタリ重なっていると感じます。

9年前にどん底まで落ちた東日本被災地域は、周囲の“健常な”地域からさまざまな援助を受けながら復興への歩みを進めることができました。

ところが、現在の“新型コロナ”では健常な地域や国がなく、全世界がもがき苦しんでいる点で、災害の深刻さは一層大きいと考えざるを得ません。

それでも…感染症は必ず収束します。ペストやコレラの感染で人類全体が危機に陥ったそのたびに人類は英知を結集し、“災害”から復活してきました。その克服の歴史の延長線上に現在の世界があり、その痕跡はわれわれの遺伝子に刻まれています。

この災害から脱却できる日を信じて、われわれは目の前の業務に取り組める充実感を感じつつ過ごしていくべきでしょう。“新型コロナ”を克服した世界では、人々の大量移動や大きなイベント、会議や学会でWEB開催という形が広まる可能性があります。災害を経験し新たな活動様式を見出していくのも人類の英知・進化といえるでしょう。少しでもトンネルの出口が見えることを祈り、皆様の病院・施設が最小限の影響で現状を切り抜け、再び平穏な日々を迎えられることを願っています。